

第8回海外研修／8th Overseas Study Tour
(於タイ)／in Thailand
August 2012

【日本「アジア英語」学会 ニューズレター第36号より

Excerpt from JAFAE Newsletter, No. 36】

JAFAE Study Tour を終えて

齋藤 智恵（国際医療福祉大学）

JAFAE の主催するスタディツアには過去2回参加したことがあった。特にウラジオストックへのスタディツアが印象に残っている。JAFAE に入会して間もなく、参加される先生方も一方的にお名前を存じ上げているだけで面識がなかった。初対面の先生方と訪れる初めてのロシア、そして現地での学会発表を控え、緊張して新潟空港に向かったことを鮮明に覚えている。実際には、その緊張が嘘のようにとても楽しく充実した時間を過ごすことができた。

今回は、そのスタディツアを企画する立場になり、今まで私が体験したような充実したツアを提供できるのだろうか、というプレッシャーに押しつぶされそうになった。企画をしてはみたもののスタディツア実施につなげることは容易ではなかった。竹下先生にご相談すると、タイ、バンコクで開催される ILAC International Conference 2012 を紹介くださった。今年の5月に入ってから実際の準備を始めたため、非常に慌ただしく理事の先生方にはご迷惑をおかけした。また、会員の皆様にも十分な周知の時間を設けることができずに申し訳なかったと反省している。このスタディツアは理事の先生方のご協力無しでは実現することができなかった。特にチュラロンコーン大学への依頼状をご執筆いただいたなど日野会長には大変ご尽力いただいた。また、参加者募集においては追加募集

など田嶋事務局長にも大変お世話になった。私自身はタイに特別なコネクションがなかったため、竹下先生には非常に多くのご提案とアドバイスを頂戴した。実際の手続きや現地での案内など竹下先生ご自身、ご家族、ご友人にご尽力いただき心から感謝している。また、ILAC International Conference 2012 参加にあたっては開催校である Suan Dusit Rajabhat University の Prof. Sompoet Panawas には様々な面でご配慮いただいた。

現地では私の不手際により参加された先生方にご迷惑をお掛けする場面が多々あった。しかしながら、どんなアクシデントも笑顔で切り抜けてくださった。ツアのあらゆる場面や状況を心から楽しんでいらっしゃる姿に何度も救われた。最後になったが、この度のスタディツアを無事に終えることができたのは、ご参加いただいた先生方おひとりおひとりのご協力と笑顔のお陰に他ならない。ツア実施前、実施後の先生方とのメールでのやりとり、現地でご一緒させていただいた時間、どれも私にとっては忘れられない思い出となつた。

今回のスタディツアは下記の日程で実施された。

8月20日(月)

バンコク・スワンナプーム国際空港に集合

8月21日(火)

チュラロンコーン大学の付属小学校と高校の英語の授業見学チュラロンコーン大学の英語の授業見学と学生、教員との意見交換会古典舞踊を鑑賞しながらタイ料理のディナー

8月22日(水)

ILAC International Conference 2012 に参加
ウェルカムディナー (ILAC 主催)

8月23日(木)

バンコク市内観光、カンチャナブリの2グループに分かれて観光。バンコク市内で合流、フェアウェルディナー

8月24日(金)

帰国（希望者のみ観光）

8月21日のチュラロンコーン大学付属小学校、高校での授業見学については木村隆先生が、大学での授業見学と意見交換会については加藤あや美先生が詳細を記されている。また、8月22日のILAC International Conference 2012については、田辺尚子先生とLyndon Small先生、8月23日のカンチャナブリへの観光の様子は橋内武先生が、全行程の様子を米岡Judy先生、この度のツアーで私たちが直面したタイの文化については竹下裕子先生が詳しく記述なさっている。ご参加いただいた先生方の玉稿をお読みいただき、タイ、バンコクへのスタディツアー・紙面版をお楽しみいただきたい。

タイの英語教育を垣間見て

木村 隆（栃山女学園大学）

私としては異例の海外出張となった。何が異例かと言うと、カメラを持たない「手ぶら」の旅行となったからである。カメラを忘れたためではない。あろうことか、バンコク到着の翌朝に故障してしまったのである。旅行に出れば写真や動画を撮りまくる私にとって、まさに痛恨の極みとも言えるツアーの幕開けであった。さて、JAFAE 2012年度海外スタディツアーの一番の目的は、Suan Dusit Rajabhat Universityが主催するILAC International Conference 2012への出席であった。しかしながら、私が興味を持っていたのは、実はILACの前日に実施された「バンコクでの学校訪問」である。ツアー企画の時点では、竹下先生の知り合いを介してチュラロンコーン大学の英語授業のみを参観させていただくことになっていたようだが、私は厚かましくも小学校・中等学校の英語授業の参観もお願いした。竹下先生はさぞお困りになったことと思うが、タイでのネットワークを駆使され、チュラロンコーン大学附属小学校・中等学校の授業参観

を実現させてくださったのである。

チュラロンコーン大学附属小学校・中等学校(Chulalongkorn University Demonstration Primary [Secondary] School)は1958年に教育学部の実験校として設立された学校である。児童生徒の約半数は同大学の教員子弟が占め、8割～9割がそのまま大学まで進学する。小学校の英語カリキュラムには2つのメニューがあり、ひとつは週5回の授業の全てをブリティッシュ・カウンシル派遣の英語ネイティブスピーカーが行うもので、もうひとつは、週に4回をタイ人教師が、残りの1回をネイティブスピーカーが指導するというものである。授業料はもちろん前者の方が高い。見学時には、低学年と中学年の児童が、それぞれネイティブ教師のクラスとタイ人教師のクラスに分かれて授業を受けていた。下の写真は私のカメラが故障する直前に撮影したもので、タイ人教師がフォニクスに基づいて綴りと発音の指導を行っているところである。日本の小学校と変わらない広さの教室なのにマイクを使っているところが面白い。

中等学校では、日本の高校に相当する学年の授業を見せていただいた。英文法の授業だったようで、タイ人の教師がタイ語で関係代名詞の用法を説明していた。私は教科書にも興味があったのだが、この学校では市販のものは用いず、校内で編集・製本したものを用いているとのことであった。教室で目を引いたのは、白い制服の生徒に交じって授業を受ける、濃緑色の野戦服を着た男子の姿であった。タイには徴兵制があり高校在学中に軍事教練を受けておくと後の兵役が免除される。そのため、このような授業風景は珍しくないのだが、平和ボケした私たちが一瞬たじろいだのは確かである。

昼食後には、チュラロンコーン大学のビジネス英語の授業を参観した。この授業では学生たちの英語プレゼン能力の高さに圧倒され

た。また授業後の学生との交流も大いに心和むものであった。詳述したいところだが、残念ながら私に許された紙幅は尽きてしまったので、詳しくは他の参加者の報告をご参照いただきたい。

最後になったが、本スタディツアーワーを企画・実施してくださった竹下先生・齋藤先生には、心からの感謝を申し上げたい。両先生のお人柄がしのばれる素晴らしい研修旅行であった。また同行の先生方にはたびたび写真や動画の撮影をお願いし、すっかり迷惑をおかけしてしまった。お詫びするとともに、先生方のご厚情に感謝する次第である。

タイ、チュラロンコーン大学での授業視察より 加藤 あや美（名古屋短期大学）

私は日本「アジア英語」学会に入会して3年目で、これまで学会の日程と本務校の業務が重なってしまうということが多く、学会に積極的に参加したいとは思いつつ、なかなか参加できないという状況が続いていた。今年度は是非とも学会に参加したいと思っていたところ、JAFAE 主催の海外スタディツアーオーのお知らせをいただいたため、思い切って申込みをし、2012年8月20日から24日の日程でタイ・バンコクでのスタディツアーオーに参加した。

今回のスタディツアーオーでは、バンコク市内の学校見学及び ILAC International Conference 2012への参加が主なプログラムであった。ILAC では、様々な国や地域からの参加者があり、大変盛況であった。また、スタディツアーオーに参加した先生方のご発表も非常に貴重なものばかりであった。ここでは、8月21日に実施されたチュラロンコーン大学での授業見学についてご報告をさせていただきたい。

チュラロンコーン大学で見学させていただいた授業はビジネス専攻の3年次に在学する学生の授業であった。授業内容は、学生達が3名で1つのグループを作り、自分達の考え

た商品やサービスについて PowerPoint を駆使し英語でプレゼンテーションをして、いかに効果的なマーケティング戦略や広告宣伝を行うかということを考えるものであった。私は、今回初めてタイを訪問したのだが、これまでタイ出身の友人から「タイの人はシャイなので、英語を話すことが苦手だ。」と聞いており、日本人と似ているところがあるのだと思っていた。しかし、プレゼンが始まってしまぐ、その認識はどこかへ飛んでしまった。彼らの英語でのプレゼンはとても流暢で、ほとんど資料に目を落とすことなく堂々と英語での発表をこなす学生もいた。彼らが英語を専門に学んでいる学生ではなく、ビジネスを専攻している学生達であるということも、私達を大いに驚かせた。さらに、英語力だけでなく、プレゼン能力の高さも目を見張るものがあった。彼らがプレゼンで用いていた PowerPoint には、目を引く写真だけでなく、音楽や動画、自作の画像なども添付されており、様々な工夫が見られた。授業後には学生達と会話をすることことができたのだが、ある一人の男子学生に“Do you enjoy studying English?”と尋ねたところ、笑顔で“Yes!”と返答してくれた。そして、「大学を卒業したら、海外留学をしてみたい。もちろん、日本にも行ってみたい。」と語ってくれた。目を輝かせて将来を語る学生の姿を見て、今後ますますこの国は発展していくのだろうとタイの明るい未来が見えたような気がした。

今回、思い切ってスタディツアーオーに参加して本当に良かったと思っている。大変貴重な経験をさせていただけただけでなく、共に参加した先生方と色々なお話ができたことは、何よりも有意義な時間であった。現地での様々な手配から訪問先とのやり取りまで一気に引き受け下さっていた竹下先生、ここまででのスタディツアーオーを準備し、一切のトラブルなく実施して下さった齋藤先生、それから、

ご一緒した先生方、本当に素晴らしい経験をさせていただき、ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

ILAC Conference BKK, Aug 22nd, 2012 Lyndon Small (Fukuoka University)

I always love the tropical feeling of Thailand. Sudden torrential rain can bucket down from thunderstorms in August. But fortunately rain did not spoil the days of this year's ILAC conference, held at the Suan Dusit Rajabhat University.

I met most of the other JAFAE study tour members at the university on the first day of the conference, as I'd arrived in Bangkok the previous afternoon and could not attend the visit to Chulalongkorn University to watch the demonstration lessons.

This was my first time to attend and also present at an ILAC conference, although I have presented at other conferences in and near Thailand.

Owing to the fact that my time with the JAFAE members was so brief, I mainly want to comment on the message of a plenary speaker, Dr. Andy Kirkpatrick, regarding English as a lingua franca in ASEAN. In particular, he emphasized that almost all native English speakers do not speak standard forms of English. He suggested that intelligibility is a key to speaking (English) as a lingua franca and further to this, that it would be better for learners from other countries to study English in places such as the Philippines, Malaysia and Hong Kong. The perceived benefit of this is that non-native English speakers make a conscious effort to be understood when using English as a lingua franca.

However, I feel that perhaps the biggest attraction of studying English in places such as the UK, USA and Australia, is the whole cultural experience, rather than a 'here and now' utilitarian view of language use. So too, I could study Japanese in Australia. But that cannot compare to my experience of living and interacting in Japan. In other countries, udon [or fill in the blank] just doesn't taste the same.

バンコクスタディツアーパートに参加して

田辺 尚子（安田女子大学）

私はこのスタディツアーパートを機に日本「アジア英語」学会に入会し、初めてのタイ訪問と、そして初めての海外での学会発表を無事終えることができた。このツアーオブバンコクで本学会の良さを存分に体感することができ、思い切って入会してよかったですと心から感謝している。バンコクの小学校・高校・大学の授業見学、学会参加、観光とすべてにおいて感銘を受けたことが数多くあるが、紙面の関係上、学会参加を中心に報告する。

The 2012 International Conference "Cultural and Linguistic Diversity in ASEAN"はバンコクの Suan Dusit Rajabhat University の the Institute of Language, Art and Culture (ILAC) が主催する第 2 回目の国際大会である。ILAC はタイの芸術と文化に関するセミナーを2005 年から毎年開催してきたが、2015 年に予定されている ASEAN Community の設立を祝して昨年 2011 年にthe first ILAC International Conference を開催した。今回は 2 回目ということで、plenary speaker として Andy Kirkpatrick 氏 (Griffith University) と Richard Watson Todd 氏 (King Mongkut's University of Technology Thonburi) を迎え、2 日間に渡り 38 名の口頭発表と 10 件のポスター発表が行われた。

私が最初に感銘を受けたことは、ILAC がこのような立派な国際大会を企画され、スタッフと学生の連携のもと見事に運営しておられたことである。と言うのも、私の勤務校は広島市内の伝統ある女子大学だが、同様の国際大会をわが大学で開催するとなると、ASEAN と日本という環境が異なるということを差し引いても、その発想も運営力もとうてい及ばないのではないかと思ったからである。Suan Dusit Rajabhat University はもともと教員養成大学の一つであったことから、いわゆる public university と比較すると入りやすい大学に分類される。場所もバンコク市内からかなり離れたところに位置している。2006 年に初めて公表されたタイの大学のランキング（タイ教育省所管のCommission of Higher Education 発表）によると、教育と研究の 2 方面から評価して 5 グループに分類した中で同大学は両方面で上から 4 番目のグループに位置づけられている。（ちなみに、前日に授業参観させていただいた Chulalongkorn University は両方面で 1 番目のグループに位置づけられ、日本で言えば東京大学のような存在で、参観させていただいたビジネス英語の授業での学生のプレゼンテーションも素晴らしいものだった。）今回の大会では多くの学生が発表を聴講したり運営に参加したりしていたが、このような有意義な機会を私の学生にも与えることができたら、と切に思うと同時に、それには私たち教員の力量が問われることを痛感した次第である。

次に感銘を受けたのは、Kirkpatrick 氏の講演“Teaching English as a lingua franca in ASEAN: maintaining linguistic and cultural diversity”である。その中で Kirkpatrick 氏が提唱された 6 つの Principles of The Lingua Franca Approach は日本の英語学習者・英語教師にとってどれも斬新なものであった。中でも、Principle #3: Local multilinguals who are

suitably trained provide the most appropriate English language teachers. として、the lingua franca approach ではノンネイティブ教員（かつ、生徒と同じ言語を話す教員が望ましい）こそが必要であり、なぜなら生徒に対して言語的な目標と異文化能力を提示することができるからであり、英語学習の手助けとして母語を活用すべきだという主張は、日本人英語教師に是非とも伝えたいメッセージだった。と言うのは、私の口頭発表である“Conducting EFL Classes in English: Belief and Reality for Japanese Teachers”は、来年度から施行される高等学校学習指導要領の「授業は英語で行うことを基本とする」に対する高校教師の意識調査についての発表だったが、英語の授業で日本語を使用する場合の裏付けとして Kirkpatrick 氏の主張は十分検討に値するものである。また、Kirkpatrick 氏は早期英語教育については母語能力の育成を優先すべきという理由から反対の立場をとっており、最近フィリピンやマレーシアで英語ではなく現地語による教育に戻っている例を挙げておられた。日本では昨年度より小学校 5、6 年生での外国語活動が始まったばかりであるのに、4 年生以下の必修化の検討を始めたというニュースが先日報道されていたが、十分な検討と議論を望みたいところである。

何度も振り返ってみても充実した楽しい 5 日間だった。これも、あらゆる面で参加者のために便宜を図ってくださった竹下先生と、細かな配慮で円滑に雑事を処理してくださった齋藤先生のご尽力のお蔭と心から感謝申し上げます。

授業・学会・カンチャナブリー
2012 JAFAE Study Tour
橋内武（桃山学院大学）

2012 年夏の JAFAE Study Tour (8 月 20 日～24 日) は、Bangkok の Suan Dusit Rajabhat

University 開催の国際学会“Cultural and Linguistic Diversity in ASEAN”(8月22日と23日)に参加することが主目的であった。それと前後して、チュラロンコーン大学教育学部付属小学校・高校と同大学ビジネス学部での英語授業見学にオプショナルのエクスカーションを加えることで、4泊5日のタイ研修旅行が毎日新鮮で刺激的な日々になった。

まず、21日(火)の授業見学で観察されたことを記す。小学校は1年から英語が導入されていること、低学年では英語の音声特徴が認識され、中学年では文字を導入してフォニックスの原理を用いて音と文字の関係を体系的に学習すること、そしてタイ人教師と英語母語の教師はそれぞれ独立した授業を担当することに気付いた。高校では英文法(能動態と受動態)の授業風景を参観した。タイ語は声調言語のため、語尾変化を含む語形の習得に苦労する様子が窺えた。午後に参観した同大学ビジネス学部の授業は、新商品のキャンペーンを英語で企画・発表するものであり、各グループの創造性と積極性に感心した。

国際学会の方は第1日(8月22日)のみ参加した。主催大学は教員養成を中心とした高度職業人養成大学の一つである。まず、開会直後にDr. Tim Curtis(UNESCO, Bangkok)が基調講演を行い、続いてProf. Andy Kirkpatrick(Griffith University)による全体講演“Teaching English as a lingua franca in ASEAN: maintaining linguistic and cultural diversity”があり、参加者に大いに知的刺激を与えた。午後の研究発表は3つの分科会で行われ、JAFAE会員6名が活躍した。その詳細については別の執筆者に委ねる。夕方の歓迎パーティでは、JAFAEを代表して橋内が挨拶をし、高校検定教科書POLESTAR English Series(全4巻)を本学会組織委員長であるDr. Wanida Anchaleewittayakul(the Director of Language, Art and Culture, Suan Dusit Rajabhat University)に贈呈した。その後、学生たちによ

る華やかなタイ舞踊の公演があった。これこそ‘Thai hospitality’というものなのだろう。

翌8月23日(木)のエクスカーションは参加者が2班に分かれて、それぞれの目的地に向かった。私は上斗・米岡・齋藤の3氏とともに、カンチャナブリ・ツアーに参加した。私自身、この20年来、第二次世界大戦当時多大な人的犠牲のうえに建設された泰緬鉄道に関する史実を調べていたので、ついに現地(連合軍共同墓地、JEATH戦争博物館、第二次世界大戦博物館、クワイ河鉄橋など)を訪れることができて感慨無量である。特に感激したのは、岡山県出身で元日本陸軍通訳の長瀬隆氏が自ら建立したクワイ河平和寺院をこの目で見、JEATH戦争博物館の横に建つ氏の立像にこの手で触ることができたことである。この「クワイ河に虹をかけた男」は、去る2011年6月に93歳で没した。135回に及ぶタイへの贖罪の旅を通して、氏が生前実践した「たった一人の戦後処理」は、今後永く記憶されるべきであろう。詳しくは、満田康弘著『クワイ河に虹をかけた男—元陸軍通訳永瀬隆の戦後』(梨の木舎、2011)を参照されたい。

FOUR TRIPS IN ONE – My memories of the

Thailand Study Tour 2012

Judy Yoneoka (Kumamoto Gakuen University)

I'd waited over 30 years; someone had owed me a trip to Thailand ever since my first plans were cancelled way back in 1979, due to the revolution in Iran (don't ask the connection; those who know, know). I'd always been fascinated with the country, too; the graceful hands of the dancers and soft, mellifluous sounds of the language. So when I heard that Professor Takeshita and Professor Saito were planning this year's study tour to that very country, I jumped at the chance.

And to just to make the prospect even more irresistible, I learned we would be visiting classes at Chulalongkorn University, Thailand's best, which has an exchange program with our university and has sent several wonderful students over the years to study in my seminar.

"Trip 1": Reunion with old friends. I spent my first evening in Thailand with three of my past students, who treated me to a pleasant boat ride (it was a regular ferry boat, but still a lovely introduction to the best transportation in Bangkok) and wonderful dinner at a beautiful riverside restaurant. They reintroduced me to Masala curry, which they informed me ranks #1 as the world's best food on a CNN list. After tasting it at that restaurant, I certainly understand why!

"Trip 2": Class visitation day. Starting out with Chulalongkorn University elementary school, our group toured around the grounds and visited several classes, of which we naturally found the English classes especially interesting. What struck me most was the variety in teaching methods, which were left up to the individual instructors, even though the textbooks were the same. Some teachers taught writing, some used tape recorders, others used phonics cards—and classes were completely or mostly taught in English. It was not a question of which methods were "better" for the students, but which methods fit the instructors best.

Next, we "graduated" to the high school, where we were able to visit a grammar class, which we were a bit surprised to find being taught in Thai "for the entrance exam" (where have we heard this before?). The students were not afraid to do some code-switching,

however; upon hearing the teacher tell us "Please walk around and have a look", one student queried in excellent English, "May I walk around and have a look too?" We moved on to a university class in the afternoon; a very entertaining course with students presenting business schemes in English. The freedom of the class atmosphere was especially interesting; students walked in and out as necessary, and even the teacher stepped outside to answer her cell phone—twice. Someone would have been screaming "gakkyu hokai" in Japan—but through it all the students performed admirably. Our tour of Chulalongkorn University ended for me with a business visit to the international center, to discuss how I could better prepare students from our university to avail themselves of everything Chula has to offer.

"Trip 3": The conference. All of our group participated in The 2012 ILAC International Conference "Cultural and Linguistic Diversity in ASEAN" at Suan Dusit Rajabhat University on August 23-24, either as presenters or observers. After a very interesting keynote speech by Tim Curtis and plenary lecture by Andy Kirkpatrick, it was our turn. Professor Takeshita had conveniently asked the conference organizers to arrange our presentations on the first day, so at least one of us, if not two, were "on" each session. When we had all finished, I found time to enjoy a lovely Thai massage before a wonderful banquet that evening, including the very thing I had waited for 30 years to see: some nice authentic Thai dancing. I would have liked to stay for the second day of the conference and listened to some of the other very interesting sounding presentations, but it was on to...

“Trip 4”: The history tour. For our final day, there were two options: a shopping/city tour (plus elephant), and a tour of Japanese pre-1945 history at Kanchanaburi, 2 hours out of Bangkok, led by none other than our very own Professor Hashiuchi. Although I do admit missing the elephant, there was no way I was going to pass up the opportunity to tour a sensitive area with people who share my own passion for local history. “The Bridge over the River Kwai” had been part of my consciousness since childhood, but I never even knew that it really existed, much less dreamed that I would be crossing it someday with three Japanese colleagues. Nor did I ever think I would hear the story of Takashi Nagase, the Japanese army interpreter who spent the rest of his life atoning for his actions during the war, or see a grown man (=Hashiuchi-sensei) *skipping* out of pure excitement at finally reaching the statue of this man, his mentor.

All in all, it was an incredible trip. I don't think I have ever experienced such a fulfilling four days as those, and I would like to take this opportunity to express my sincere gratitude to everyone who made them possible.

I do worry just a bit about the fact that, now I have seen Thailand, I can die peacefully. But I have an ace up my sleeve. Because of those fateful days in Iran some 30 years ago ... I also lost the chance to go to Turkey.

タイの風に吹かれて

竹下裕子（東洋英和女学院大学）

カンファレンスの翌日、カンチャナブリとローズガーデンのふた手に分かれて日中を過ごした JAFAE のメンバーは、6 時にバンコク

市内のレストランで落ち合う約束をした。けれども、どちらも 1 時間半ほども遅れて到着した。激しい渋滞が原因であった。途中、予約時間を30 分過ぎたところで、レストランから竹下の携帯に電話が入った。遅れていることをとがめるわけでもなく、予約を取り消すと言ってきたわけでもなく、単に、向かっているところですよね、という確認の電話だった。それさえ確認できれば、私たちのテーブルは 2 時間遅れても、3 時間遅れても確保されているのだった。日常茶飯事だから。日本人がタイ人と待ち合わせをし、やはり渋滞が原因で遅刻すると、日本人は汗を拭きながら、息せき切って待ち合わせ場所に到着し、遅れたことを詫びる。相手は平常心で “It's OK. Don't worry.” と言う。逆にタイ人が遅れると、詫びのことばがないわけではないが、真っ蒼な顔をしているわけでもなく、息が切れているわけでもなく、落ち着いて “The traffic was very bad because of the rain.” と言うかもしれない。携帯電話がなかった時代から今日まで、これは変わらない情景である。バンコクでは、「国際的な」時間が分割みで進んでいると同時に、ゆったりとした季節の流れに任せた「農耕民族の」時間も流れているかのようである。

観光客が訪れる寺には、2 種類の拝観料が設定されている。タイ人用と外国人用である。タイ人用の料金は英語では書かれていないので、外国人観光客は気がつかないが、「多くもっている者から多く取って何が悪い」のである。ツアーのメンバーが気づいていたかどうかは別として、当然のことながら、私たちもあちらこちらで余分に取られていたはずである。時間の流れも、お金の流れも、ダブルスタンダードが巧みに機能している。少し前までは、バンコクの高級車はベンツとBMW であったが、今回はポルシェを何台も見かけた。タイ人曰く、タイは依然として

不況だが、集まるところにはとてつもないお金が集まり、富める者はますます富んでいる。そしてタイ人はそのような経済格差、そして社会の階級を静かに受け入れる。ポルシェのオーナーは、自分の事業がさらに繁栄するよう、英語で国際ビジネスを展開する。露店の売り子は、300 円の T シャツが少しでも多く売れるよう、英語で（そして日本語でも）客引きをする。ニーズに応じた言語コミュニケーションが営まれているのである。言うまでもなく、わざわざタイに出かけていかなくても、さまざまな機会に、タイ人の考え方を知り、コミュニケーションを図ることができる。日本の研究室で、タイ人が書いた英語の論文を読み、タイ人と英語によるメールのやり取りもできる。スカイプを通じて、彼らと直接話すこともできる。そのようなことをしながら、タイ人の英語に触れ、その人の価値観や信条に触ることは不可能ではない。実際、多くのアジア英語の研究者が、さまざまな媒体をもちいて、日本で研究をしているわけである。けれども、言語と文化は一体である。ある言語の話者とその人の文化を切り離すことはできない。タイ人の英語はなぜそういう英語なのか、なぜそういう態度でそういうことを言うのか、なぜ英単語の本来の場所ではなく、別の場所にアクセントを置くのか、なぜあることが重要であり、別のこととはさほど重要ではないと彼らが言うのか。。。そういうことは、実際にタイに行き、タイ人と対面して話をし、タイの風に吹かれて街を歩き、雑踏のなかでタイ語に耳を傾けて初めて、納得がいくことが多い。今回のスタディツアーは、少しでもそのような経験ができたという意味で、とても貴重な機会であったと思う。